

千葉に建築を訪ねる

八 幕張メッセの展開をみる

建築家 三沢 浩

幕張メッセの「新展示場・北ホール」が増設されたのは、一九九七年九月末である。折からの年間最大イベント「モーターショー」に合わせて完成させたのだが、基本計画は横文彦の横総合計画事務所で、三年前一九九四年の夏に始まっていた。この新しい建物は、



JR京葉線の海浜幕張駅を通過する時の車窓から眺めただけで、中に入ってみていないから、私には語る資格はない。

しかしその第一期である「幕張メッセ国際展示場」と「イベントホール」は、一九八九年に完成しているのであり、周辺整備が充分でなかった頃にも見えているから、その周辺の変貌振りにも大層驚いている。何よりも横文彦の設計の中でも最大の単体建築でもあるのだから、その評価も必要であろう。加えて私の事務所は横設計の「東京都体育館」に面していて、否応なく毎日対面しているのであり、雨の日や雪の日には、体育館の大屋根から滝の如く流れ落ちる雨や、雪解け水を目の当たりにして、大型建築の責任の重さを痛感していることも加えてよかるう。この比較をするのは、「体育館」の設計が一九八四年から一九八六年九月に及び、「メッセ第一期」の方は、このあと一九八六年一〇月から一九八七年に続いているからでもある。しかし「体育館」は決定に手間取り、一九九〇年に完成し、「メッセ」は一年早くて一九八九年九月に出来たのである。横事務所の陣容に如何に精銳がいたにしても、この二つの同時進行には苦しんだらしく、悲鳴が脳から聞こえてきたこ

とを思い出す。

横文彦の設計への細かさは定評があるが、「メッセ」の鉄骨のジョイント、つまり大空間の設定には並々ならぬ気を遣っていたと聞いた。模型を作り、構造的な解決に随分時間を割いていたのだろう。ということはこの巨大建築は、一九七二年の「大阪臨海スポーツセンター」の特徴ある連続屋根を思い出させるからだ。太いパイプ梁のスパン四〇mに、鉄骨ガーダーを飛行機の翼のように羽ばたかせた形で、何となく重い構造で良くなかった。それに対して「メッセ」の軽さは明らかに以後二〇年のキャリアと反省が見られ、成功しているのである。勿論、外から見た時の軽さと、中に入って天井を見上げた時の輻輳する鉄骨トラスのびっしり並ぶ有様にはびっくりするのだが、良く見るとジョイントが整理され、こまかな網の目をつくり、それと同じ単位で大梁の三角トラスも組まれているのを知る。原理は大阪の場合とあまり変わらないように見えるが、細かな神経が全体を包み、それが大きな弧となって柔らかさと軽さをつくっている。

長さ五三〇mを三分割、二つの屋根は円弧半径一〇〇〇mを画き、三つ目は再び途中ま

で立ち上がる。それを貫くのが天窓二列、その下にスパイン（背骨）と呼ぶ大梁が通り、神経や動脈を通している。三つの棟は中で二・三・三と間仕切られ、驚いたことに無柱空間とはしないで、間仕切の支柱を兼ねた柱が立つ。巨大空間だから気が付きにくいがこの柱合計一〇本が構造の助けになっていたのである。この三つの棟は二本の通路もつくり、

大きい円弧の中央を抜けて片方は「イベントホール」入口に導かれる「やすらぎモール」。海側への見通しを最大限に考えたという横文彦の最初のアイデアは、ホールとメッセ展示場の間に目を休ませる空間と、海の景色とり入れであったという。しかしこのメッセが出来上がる頃、そのホールと対称性を持たせたかのように、千葉県のスタジアムの建設が始まり、設計者を大いに慨嘆させたのであった。従ってこのメッセ空間では、僅か三〇〇mしか離れていない海浜を感じ取ることは出来なくなってしまう。

この「ホール」は体育館にもコンサートにも、そして展示場にも使える五〇〇〇席を持つ「かぶとがに」スタイルだが、これはまさに「東京都体育館」に類似し、子分格といえる。同時期だったからやむを得ない発想とも

思えるが、この方は先輩格に「藤沢市秋吉台体育館」がある。ただし円形ではなく楕円形で、スカイライトを持つ二本のスパインが弧を描き、二枚の葉っぱの間に、大きなかまぼこ屋根がはさまっている。「東京都体育館」は大型になったせいでもあるが、同じ「かぶとがに」でも四枚の葉っぱと、中心部分の補助屋根に変わって進歩している。だからあとから出来た「幕張イベントホール」は、その両者の良い所を採って単純な形におさまったともいえる。

JR駅から近付くにはペDESTリアンデッキの世話になるのだが、このメッセの全体も搬入搬出の激しいサービスマンと、一日二〇万人にも膨れ上がる入場者をうまく捌くために、ペデッキの効用が著しい。今では第二期の北ホールが出来て、「セントラル広場」とも呼ばれている「メッセ展示場」にペデッキは至る。その入口にきのこ型の覆い屋根の鉄骨が朱で塗られていて、駅方向からの強い目印になる。その当初は周辺に何も無い所から、赤さがけばけばしいと思っただけだが、周辺に高層や賑やかビルが建て込むと、ステンレスの銀色一色のこのメッセ全体の中で、程好い色づけだったと今は感ずるのである。

出来た当初は、ペデッキですら中途半端で煩わしく見えたものが、今では車の交通を下に見てホテルへとアプローチする。一〇年の年月を経て、ようやく幕張副都心が見えてきたのである。

その当初、メッセの敷地を含めて、千葉県企業局の考えた埋立地は五五二分というから広い。コンベンションセンターであるメッセを中心施設として、ホテル、ショッピング、公園を計画し、企業進出をはかった。特に二六、

人の住宅街区が進行中で、評判を博していることも付け加えていいだろう。評判というのは外国の町のような、新しい街並計画のことであり、このスケールでは全国にその例がない街区が出来つつあるからだ。メッセとはドイツ語で、見本市のこと。かつて戦後に村田政真設計の「東京国際貿易センター」のドームが、東京見本市会場とも呼ばれて、大いに流行った。ドイツの各都市のメッセを見たこともあるが、次第に大きくなって、メッセは情報流通とコミュニケーションの場となっていた。今、幕張も第二期会場をつくり、東京臨海のメッセ「国際展示場ビッグサイト」に対抗をはかる。どんな展開になるのか、誰もが見守る状況にある。(続)